
実験的 途中書き文 題名『C.P.』予定

ほぺ8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実験的 途中書き文 題名『C・P』予定

【Nコード】

N7319L

【作者名】

ほへ8

【あらすじ】

あらすじなど必要なのかな・・・

途中書き文なのに・・・

一応、SFミステリー

舞台は20XX年

実験的 途中書き文 ただ、うpしたかっただけ
特に構成考えず適当にごちゃごちゃと書いてしまった
少し後悔（公開）

以下より本文開始

／／／／／／／／

ギョ、ギョ、ぽっ、ぽっ、ぽっ、ぽっ、ぽっ、ぽっ、

『殺す』

頭の中に浮かんでいる二つのイメージ。

最初のイメージは雨。

もう一つは唐突だった。ただ人とすれ違っただけで、頭の中に浮かぶイメージ。赤の他人に対して何でそんな気持ちになるのか分からない。

『殺す』

どんなに気を紛らわせても消すことが出来ない。嫌になった。どうしてこんな感情を、どうして人を殺そうなんて思うんだ。「死にたい」

でどうするの。こそこそ入ったらこっちが悪そうじゃん」

「いや、でもな。確実な方法をとった方がいいと思うぞ」

「確実？何を言ってるの。私がいれば何でも確実になるよ」

「なんて自信……」

俺は呆れる。なんて自信家、いや自尊心が強すぎるだけか？

「私だからね」

「自惚れ過ぎだ」

俺の目の前の少女は笑う。

こいつは、紗那と言う名前らしい。この名前らしいというのは、こいつの正体は俺の中ではっきりしていないからだ。素性について聞こうとすると、いつも煙に巻かれる。でも、こいつは何だかだと信頼できる奴だ。こいつが言った通り、何でも確実にする。そう、俺の望みを叶えるために色々準備してくれた。まだ、出会って一ヶ月ほどだが十分信頼に足る奴だと思っている。まあ、言動におかしい所はあるが……

「まあ、冗談はこれぐらいにして。作戦はこうだよ」

そんな信頼のおける少女はそんな事を言って、一枚の紙を渡してきた。それを見ると、

私に着いて来い。

とだけ書いてあった。

「どう？なかなかの作戦でしょ」

一瞬の内に信頼が砕け散ろうとしていた。

「当たって砕けるって事か？」

「違うよ。言葉の通り、そのままの事だけ……」

「これは作戦じゃない。絶対違う」

「んつとね……、互いの信頼感が結果を生む作戦程度で認識すればいいよ」

なんだっそら

「この瞬間俺は信頼感を失って、失望感を味わったよ」

「語呂がいいね」

「賞賛ありがとう・・・じゃなくて、ちゃんとした説明をしるよ」

「そんな俺の反応に対し少女はむむ、という感じのしかめっ面でこっちを見ながら言う。」

「本当にこれが作戦なんだけど・・・」
マジかよ・・・

第三部 侵入

「それじゃあ、入りますか」

沙那はそんな事を言う。

「どうやって入るんだ？」

「それはね・・・」

と言つて、ポケットから何かを出す。

「このカードが有ればね良いんだよ」

・・・IDカード？何でそんなもん持つてんの？

「なるほどな、それなら真正面から入れるな」

「うん、これなら大丈夫。でも・・・」

少し間を開けた後、沙那はキリッとして言う。

「少し間を開けて入るべきだよ」

「その心は？」

「それは簡単なことだよ。怪しまれないようにしないとね。私みたいのと君みたいのが一緒にいると注目されるでしょ」

ちよつとだけ頷く素振りをする。

「まあ、分からなくもない」

。考えてみれば、傍から見ると、少女とロリコン青年なのかな・・・
それはご勘弁。

「というわけで行ってくるよ。ちなみに入るタイミングは連絡するから」

「分かった。取り敢えず頑張れよ」
色々とな・・・

（十分後）

「門前払いされた・・・」

「アホか？お前は」

流石は一流企業のセキュリティ・・・じゃなくて、当たり前だ。こんな子供をセキュリティエリアに安々と入れる企業はまず無い。もし真正面から入れたら、こんな会社に務めていた俺は恥ずかしくて死にそうだ。

「もうさあ、IDカード見せたらね。『はいはい、お父さんのカードを勝手に持ち出したらダメだよ。お嬢ちゃん』なんて言うんだよ！警備員の分際で」

警備員は仕事をしただけです。あと、その警備員は定型文的なことを言うなあ。

「酷いよね。全く相手にしてくれないんだよ、子供扱いしてさあ。まったく、私はレディーだよ」

お前もホント定型文的だな・・・。
そんなバカバカしいやり取りを十五分ほどする。

第四部 侵入？

結局、裏から入った。

「やっぱり、こつちからだよね」
そりゃそうだろ。そんな事より、今俺は清掃員の格好をしている。なんて典型的な侵入・・・

「そんな事より、どこから手に入れたんだよこの服」

「うん、とね。そこに居た清掃員のおじさんから・・・」

「嘘つけ」

「うん、よく分かったね。ちなみにちゃんとした手順を踏んで手に入れたから」

「そうか、と言い。無理やり納得したような振りをしたが、どうしても納得出来ないことがある。」

「何で、お前は『清掃用具カート』に入ってるの？」

「沙那は体操座りをしている。思いのほか体が小さいためかスッポリ入る上に掃除道具まで入れることの出来るスペースもある。その様子は乳母車に乗ってしまった少女・・・とは違うか。」

「早く押してよ」

「と、言ってくる。もちろん『わー、かわいい。このままお持ち帰りいー』みたいな気持ちには全然ならん。俺は何だか馬鹿しく思ってしまう。ちなみに沙那に『清掃用具カート』の話をしてはならんスルー、突っ込んだら負けだ。」

「分かった。移動手段はエレベーターか？」

「OK、計画通りでよろしい。実に典型的でいいね」

「自覚してたのか・・・」

「沙那が中に完全に隠れてから俺はカートを押して、従業員専用の階にあるエレベーターの前まで来る。そして、上の階行きボタンを人差し指で押す。」

「ねえ、話さない？」

「沙那がいきなり話してきた。俺は一瞬ヒヤッとして慌てて周りを見回す。良かった誰もいない。」

「馬鹿か！誰かに聞かれたらどうするんだ」

「大丈夫、この時間帯の人の流れは把握してるから」

「嘘だろ」

「いや、これはホント」

「嘘つけ、と言いたいが多分本当だ。そんな事より何で話しかけて

きたんだ？

「ちなみに待ってる時間が退屈だからだよ」

先読みすんなよ。俺は質問を仕掛けるのを阻害されて少し御冠だ。イライラではなく、イリヤイリヤ（炒りや炒りや）と言うような感じだ。分かりやすく言うと、心を炒られた気分。

「暇つぶしに何の話するの」

「お前がお題考えるんじゃないのか、普通」

「面白そうな話題ないんだもん。ねね、良いでしょ」

「お、エレベーターの到着だ」

もちろん無視。お題を考えるのが面倒だから無視をした、だけが理由ではない。俺はこの計画を失敗にたくないからだ。大抵、もちろんこの一流企業なら当然だがエレベーターには監視カメラ付いている。一応対応としてカートの方は上にカバーを被せているから沙那に関しては大丈夫だが、俺が誰もいないはずなのに会話をしている所を見られるとまずい。もし、俺がそんな素振りをしなくてもマイクが付いている可能性もある。

そんな事を自然に察知したのか、さっきまでカートの中でじたばたしていた沙那が急に大人しくなった。

もしかして、KY（空気読める子）？

馬鹿か俺は。

エレベーターは退屈だ。この会社よく人の行き来がある。そのためか、最上階まで時間がかかる。そんな退屈な俺は過去の事を思い起こす。

第五部 過去話1 閑話休題+

「ねえ、協力してあげようか」

雨の中、俺が初めて聞いたそいつの声だった。

「なんで、胡散臭そうな。お前を信じなきゃいかんのだ」

俺は強く言った。ちなみにここはファーストフードショップの店内。俺は何故か中学生ぐらいの女の子と席を一緒にしている。女の子はむーっとわざとらしく顔をむくれてから、一言いう。

「こんなかわいい女の子に向かって『胡散臭い』とは何かな」

「その『こんなかわいい女の子』がまさに胡散臭いんだが・・・」

「うっ・・・」

自覚したか、このうぬぼれ屋め。俺はしてやったりみたいな顔をする。

「こんな性悪一生・・・結婚いや、彼女出来ませんよ」

ヒュン、ぐさ。心に言葉のナイフが刺さった。痛いかなりイタイ。

「ちよっと、言い過ぎじゃないか」

「年齢イコール彼女いない歴が何を言う」

・・・、えぐられた。痛みを通り越して痛みを感じれない。本当に深刻な悩みなんだよ、頼むからこれ以上豆腐ハートを傷つけないでくれよ・・・っと言えない俺がいたりする。プライドが自衛本能を抑止する。なんて事だ！

そんな俺の頭の中の活動を無視して話を始める少女。

「まあ、与太話はこれまでにして、いい感じに場が暖まったから本題に戻ろうかな」

閑話休題か？違う、断じて違う。さっきの話は無視できん。俺にとつては本編だぞその話題。

少女は変な方向に暖まった俺をやはり無視して話をする。

「正確には協力するから、協力して欲しいんだよ」

「どういう意味だ・・・」

俺は声のトーンを下げる。俺にはコイツの言っている意味を大体理解出来るような気がする。いや、俺が勤めている会社の事絡みだと思っ。

「大体、私が聞きたいことは分かるでしょ」

「何のことだ？」

だが、俺はあえて言わない。もしかしたら、何か引つ掛けるために言った可能性も考えられる。俺はそこまで会社に従順ではないが一応社会人としてのプライドが有る。会社の事を安々と漏らすことは出来ない。

少女は俺が答えるつもりが無いのと、敵視している事を認識すると、

「そうだね、こつちも腹を割って話さないといけないよね」

と、言う。

「簡単にいえばあなたの会社、いや一週間ほど前にあなたの会社の機械で起こった転送事故の事だよ」

第六部 過去話2 転送事故

事故は一週間前にあった。それは死亡事故だった。不慮の事故・
・というわけではない。そして、この事故は社会的な問題にはなっていない。なぜなら、死んだのは『殺人犯』だったのも理由の一つだろう。

アメリカのある場所で殺人事件が起こった。一家殺害と言うある意味メジャーだが内容はとてもマイナーと言えるものだった。その一家のほとんどは『ひき肉』になっていた。一家の構成は老人二人、大人二人、子供三人で畜産を営んでいたという平々凡々な家庭だった。でも、一週間で変わってしまった。家族は七人、一日に一人ずつ殺したらしい、家族の目の前で。殺しのサイクルは最初は焼印を使って体中に印を刻む。その後には、アメリカの細長い刺の筋切りでバンバン肉を叩き、鋸で肢体を切り分けては本人の前でミンチにする。そして、五体不満足になった体は『ひき肉』になる。

七日目に警察が来た。しかし、その時には体中に焼印をされて悶えていたおじいさんと『ひき肉』しかいなかった。犯人は警察に気づき逃げたらしい。

その後、事故が起こった。最初の殺人も含め『C T事件』とも言われていて、人間の精神を転送して、転送先にある肉体にインプットする装置が事件を解決したようなものだった。

犯人はとある企業の研究施設に逃げ込んだ。その企業は『C T』と言われる装置、正確にはそのための環境を作り上げた企業だった。ここに籠城した犯人は幸いにも研究員には手を出すことは無かった。ただ、実験中だった装置で逃げようとした。犯人は『C T』という物をよく理解していなかった。いや、分かっているながらも少しの望みに掛けてみたのかはたまた、警察に捕まりたくないというプライドがそうさせた可能性もある。『転送先に”肉体“が無ければ死んでしまう。その上装置の調整も済んでいないどこに飛ぶのか分からないぞ』研究員はそう訴えたのだが、脅されてやむなく実行したらしい。その結果、死んだ。正確には『転送元の体が死んだ』らしい。

そうして、この事件は幕を閉じた。

第七部 過去話3

あの事件の内容を瞬時に思い起こす。

「もしかして、関係者か？」

俺はあえて曖昧な質問をした質問した。これでだいぶ篩にかけられる。

「いいえ、ハッキリ言えば他人事だよ」

・・・他人事？つまり、復讐心その他もろもろの私情では無いのか。俺は考えるこの少女は何が目的なのか。

えぐっ

びしゃ。

冷たい。まず感じた感覚。俺はハツとした。

「大丈夫？」

まず視界に入ってきたのは、少女の顔だった。

「何か、すごく変だったけどどうしたの？気でも狂ったの？」

俺はまず状況把握をした。顔にかかったものに手で触れ、目で確認する。透明、多分水だ。証拠に少女の手には空のコップがある。あれ、何故水を俺の顔にぶちまけたんだ？

「お、お客さんどうしたのですか」

店員が慌てている。どうやら、水をぶちまけた事を聞いているらしい。

「大丈夫です。私は連れが酔いつぶれようとしたのでちょっと目覚ましにかけてやっただけです」

と、少女が判りやすい大嘘をつく。店員は納得していないようだ。そのためかこつちにも話しかけてきた。

「あの・・・大丈夫ですか？タオルでもお持ち致しましょうか」

「あ、大丈夫です。何の問題もありません」

やはりと言うか、店員は納得していないがこれ以上は野暮と判断した、または面倒くさくなると思ったのか、これ以上の質問は諦めて素直にタオルも持つてくることを選んだ。

俺は少女に質問することを選んだ。

「・・・で、なんで水かけた」

「簡単なことだよ。酔いつぶれようとしていたからだよ」
まだ言うかその大嘘。

「ここは歴としたファーストフードの店、お酒は売っておらんぞ」

「え、でも『ジンジャーエール』ってのがあるけど」

「あれはお酒じゃない。色はそれっぽいかもしれんが」

「じゃあ、ここにくる前に飲んだとか？」

「酔いつぶれそうなのに、ファーストフードを食いに来るとはなんて珍妙な話だよ」

そんな俺の対応を見て、少女が微笑む。

「よかった、元に戻って」

元に戻って・・・？どういう意味だ。

「そんな事より、早くここから去らない？」

少女はそう語りかけてきた。

「何で？」

「周りをちゃんと見るんだよ」

沙那に言われるがままに周りを見る。じー……。あれ、なんか視線が痛い。そういえば、ここ店の中だよな……。

「物凄く、恥ずかしい」

「そうかな、私的には真剣な話をするのにここは向かないって思っただけだよ」

「お前は神経が図太いのか、それとも脳天気なだけなのか……。そんなこんなで、店員にタオルを貸してもらった後さっさと店を出る。去り際に見た店員の顔がなんか疲れている。こういうトラブルは初めて体験したのかもしれない。『なら、良いことをした。何事も経験が一番』とバカでアホらしい考えを瞬時に消す。

「話の腰が折れちゃったけど、もう大丈夫だよ」

沙那が話しかけてくる。俺はすぐに考えをまとめ話す順序を決める。そして、

「俺はどうなった」

これが一番の疑問だった。

少女は小さく笑う。どうやら、笑い話程度の事らしい。

「雨の中で出会ったアナタだったよ」

笑い事では無かった。

考察材料 C T 説明

以上（異常）まで

意味も無く、グロを使ってしまった・・・
構成力、文章力、不安ばかり・・・

感想があると嬉しいです。

考察とかOKです

・・・

やっぱりコウカイ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7319/>

実験的 途中書き文 題名『C.P.』予定

2011年10月7日08時18分発行